

発掘調査の概要

藤原宮外周帯の調査（飛鳥藤原第201－3次）

藤原宮の大垣を取り囲む外濠と条坊道路との間には空地があり、外周帯と呼んでいます。本調査区は、藤原宮の南面大垣と六条大路との間の外周帯に位置します。既設水路の改修にともなう事前調査で、調査区は、南北約2m、東西約97m、面積195㎡で、形状は北に隣接する里道に沿って緩やかに蛇行します。東一坊坊間路の推定線上にあり、先行東一坊坊間路東西側溝の検出が期待されました。調査期間は、2019年11月18日から12月12日までです。

調査区内は既設水路による削平が著しく、遺構の残存状況は良くありませんでしたが、古代の整地層を調査区の南壁で確認するとともに、古代とみられる遺構を検出することができました。

調査区の東部では、幅0.6～0.7mの南北溝を2条確認しました。東一坊坊間路推定位置の近くで、先行東一坊坊間路東西側溝に相当する可能性があります。しかし、いずれも深さが0.2m程度しか残存せず、出土遺物も少ないため、同側溝であると断定することはできませんでした。また、調査区の西部では、幅0.7mの素掘りの東西溝を検出しました。年代の特定はできませんでしたが、古代の遺構の可能性があり、これまで空地と考えられてきた藤原宮外周帯の土地利用について、新たな知見となります。このほか、調査区西端では古代の整地層を掘り込む溝状遺構から、藤原宮期の軒瓦が出土しました。

本調査は幅2mという狭い調査区ではありましたが、様々な知見が得られました。このような調査を積み重ね、藤原宮の実態を少しずつ解明していきたいと思います。（都城発掘調査部 大林 潤）



南北溝検出状況（北東から）

藤原京左京八条三坊の調査（飛鳥藤原第202次）

市道（国道165号小山線）の一部付け替え工事にもなっており、2019年11月18日から藤原京左京八条三坊東南坪で発掘調査を実施しています（調査面積608㎡）。香久山の南西麓にあたり、法然寺の東に位置するこの場所は、現在、水田風景がひろがっています。中の川の支流である百貫川が北流しているように、旧来は、おそらく東と西の高燥地に挟まれた狭小な谷状の地形だったのでしょう。

さて、水田の耕作土や床土を掘り進めていくと、地表下1mほどの深さで、細かな砂層や拳大の礫層が見つかりました。これらの土層は、弥生時代やそれ以前に起こった洪水によって運ばれた自然堆積土と考えられます。その上面で遺構を検出しました。

中世では、縦横に伸びる小溝を多数検出しました。この小溝は、田畑耕作にともなう鋤溝と思われます。また、田畑を区画するような幅広の溝も確認でき、一部ですが、現在の水田畦畔の場所と一致するものがありました。この地での田畑耕作は、少なくとも中世にまではさかのぼるようです。

調査区の南半では、洪水によって生じた起伏を平坦に整備するような、中世の整地土が見つかりました。田畑耕作にくわえ、中世には土地を整備し、利用していたようです。調査区西の法然寺は中世の創建と伝えられており、こうした動向と関連があるのかもしれません。

さらに、斜行大溝や掘立柱建物の柱穴等、藤原京期と思われる遺構が見つかりつつあります。藤原京期には、どのような土地利用があったのか。次号で紹介する予定です。ご期待ください。

（都城発掘調査部 和田 一之輔）



調査風景（南東から）